

## 巻頭によせて

校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi



父親が我が欲望のために、食べ物を求めてすがりつく幼い我が子を見捨て、死に至らしめるという凄惨な事件がありました。物質文明に恵まれた、平和な国の暗部をえぐるような出来事です。

昭和 25 年の、ある教育家の残した一文を紹介します。

「東京に遊学していた一人息子が、不良のかどで退学になって郷里に帰ってきた。郷里では我が子の学成るのを一日千秋の思いで待っている老母が唯一人あった。朝は朝星、夜は夜星、粉骨砕身働いて、子どもの学費を送っていた我が子のこの惨めな姿を見た母は、悲嘆の余り茫然自失せんばかりであった。しかし、教養の深いこの母は気を取り直し、涙一滴も見せず愚痴一つも言わずに笑顔で我が子を迎えたのである。

こうした母の愛情にも拘わらず悪習に染まった彼は、毎夜よからぬ酒場に足を運んで遊興にふけていた。しかし母の心尽くしは変わらなかった。神掛けて我が子の目の覚める日を待つのであった。

ところが或る夜例の如く夜半に家に帰った彼が、ふと母の部屋を見ると、母は未だ寝もやらず、薄暗い一室の寢床の上に座して、いかにも沈痛な面持ちで何だか祈り続けているのである。両眼には露の玉が光っていた。この様子をふすまの隙から見た彼は、忽然として善心に還った。その昔母のねんねこ歌にあやされて、母の膝にすやすやと眠った幼年時代の純真な童心に立ち返ったのであろう。思わず走り寄って母の膝下にひれ伏した。『お母さん私が悪うございました。一切の過去を清算して出直します。どうぞお許し下さい。』とひしひしと母に抱きついたのである。母もあらん限りの力を出して我が子を抱き寄せた。感激の涙に濡れた母と子、それは敬虔そのものであった。かくて彼は救われた。発憤立志見事に成功したのである。

偉大なる哉母の愛、無言の内に絶対的感化力をもつ母の愛、かくして子どもの生命は正しくすすくと発展するのである。」